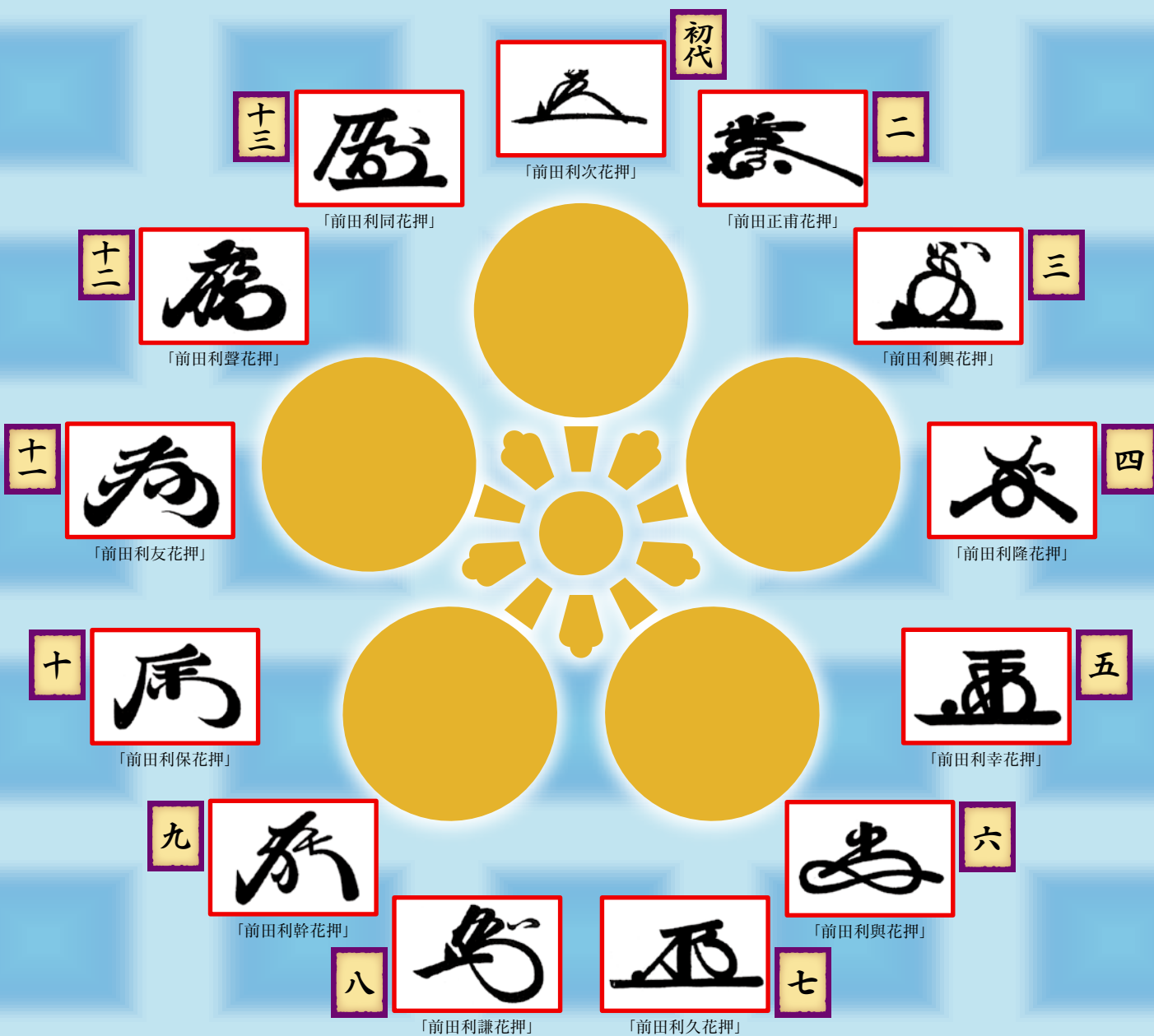


富山藩主、勢ぞろい!

— 初代利次から13代利同まで —



会 期 | 令和元年10月3日(木)～11月3日(日)
 開館時間 | 午前9時～午後5時
 (期間中は土日祝日も開館)

入場
無料

FREE
ADMISSION

四代利隆・七代利久・十代利保の花押は江東区教育委員会蔵文書、他は富山県公文書館蔵文書より。
 家紋は「みんなの知識 ちょっと便利帳」より。

目次

開催にあたって	1
はじめに	2
一 十七世紀の藩主 初代利次・二代正甫	2
二 十八世紀前半の藩主 三代利興・四代利隆・五代利幸	4
三 十八世紀後半の藩主 六代利興・七代利久・八代利謙	6
四 十九世紀前半の藩主 九代利幹・十代利保	8
五 十九世紀中頃の藩主 十一代利友・十二代利聲・十三代利同	10
六 廃藩後の藩主と富山	14
おわりに	15
◇主要参考文献	15
◇関連年表	16
◇企画展史資料一覧	17

開催にあたって

二〇一九年は、平成から令和へと改元された節目の年です。江戸時代の富山の歴史を振り返ってみても、何度も改元や藩主の「代替わり」という節目を迎えていました。今年からちょうど三八〇年前に加賀藩から分離立藩した富山藩では十二回の「代替わり」があり、十三人の藩主が登場しました。富山藩は、おおむね神通川流域にあたる地域を領有した石高十万石の藩でしたが、立藩の時点で過大な家臣団を抱えたため人件費が財政を圧迫しました。そのため、上方や飛騨の豪商らの他、加賀前田家からも多大な借財を抱えていました。また、急流河川による水害や大地震などの自然災害、城下の大半が焼失した大火からの復興、甚大な出費を強いられた度重なる公儀普請手伝いの中、藩主たちは、家臣のリストラや新田開発、特産品の開発を進め、江戸時代を通して十万石の所領を治め続けました。

今回の企画展では、当館所蔵の史資料を中心に、初代利次から十三代利同までのすべての富山藩主を取り上げ、歴代藩主の人物像や治世などについて紹介します。代替わりをしながら二三〇年の長きにわたって富山藩を治めた藩主たちの姿を垣間見られる史資料を通して、郷土富山の歴史の一端に触れていただくと同時に、県民のみなさまをはじめ、多くの方々に当館所蔵史料への関心を高めていただき、一層の活用につながる機会としていただければ幸いです。

今回の企画展を開催するにあたって、多くの方々や機関からご協力を賜りました。ここにご芳名を記して感謝の意を表します。

国立公文書館 富山県立図書館 富山県映像センター 富山市郷土博物館

石神美子（富山市） 高堂肆郎（富山市） 高浪巖（富山市） 藤田達子（富山市）

佐伯敬之（千葉県） 半田景康（三重県） 古畑弘子（東京都）

（順不同敬称略）

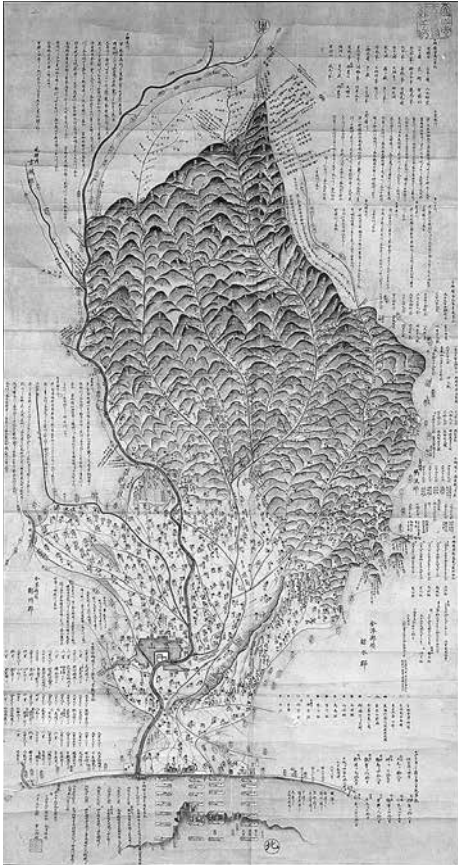
令和元年十月

富山県公文書館

はじめに

令和元年（二〇一九）から三八〇年前の寛永十六年（一六三九）、富山藩は加賀藩から越中国婦負郡、新川郡の一部、加賀国能美郡の一部からなる十万石を分知され立藩した。富山藩前田家の始祖は、加賀藩三代藩主利常の二男利次である。家紋は宗家加賀藩前田家の剣梅鉢に対して丁字梅鉢紋を使用した。藩領が分散していたため、万治三年（一六六〇）に加賀藩と領地を交換して富山町を藩領とし、富山町周辺に領地をまとめた。この結果、富山藩の領域は、おおむね神通川流域の越中国中央部となった。富山藩では、新田開発や売薬業などの産業振興に取り組んだが、立藩当初からの財政難は解決されず、江戸後期から幕末にかけては財政問題に伴う権力闘争や跡目争いが発生した。

今回の展示では、初代藩主利次から最後の藩主十三代利同までの藩主の治世や人物像、それぞれの治世下での事件やトピックスなどを六部構成で紹介する。



十万石富山御領図(富山県立図書館蔵)

一、十七世紀の藩主 初代利次・二代正甫

初代利次(一六一七年生・一六七四年没 一六三九〜一六七四年藩主)

加賀藩三代藩主前田利常は、かねてより自らの隠居と富山・大聖寺の二支藩を創立することを幕府に願っていたが、寛永十六年（一六三九）、幕府はこれに許可を与えた。利常が隠居と分藩を企図した理由としては、将軍徳川秀忠から家光の代替わりに際して有力大名が処分される中、外様大名の筆頭である加賀藩を幕府から守るためと考えられている。

当初は百塚に築城予定であったが、利次は、飯の城下として富山を加賀藩から借り受け、富山藩初代藩主として八百人を超す家臣団を引き連れて富山城へ入った。この家臣団にかかる人件費は知行高にして約九万石にもおよんだ。百塚築城は財政上からも難しく、分散していた藩領は行政的にも経済的にも不便だったため、加賀・富山両藩の領地替えが万治三年（一六六〇）に実施され、富山城付近の加賀藩領は富山藩領となった。この後、利次は富山城と城下町の整備を進めた。

また、利次は寛永二十一年（一六四四）から次々と法令を制定し、統治体制を固めた。身近な法令としては、飼い猫の売買でトラブルが多発しているため、猫の売買を禁止している。新田開発にも努力し、牛ヶ首用水の拡張や月岡野の開発を命じた。さらに神通川から西岩瀬への運河開削や、寛文十二年（一六七二）には四方より大坂への廻米を行った。この時代は荒々しい事件も発生している。承応二年（一六五三）、加賀藩家老本多家の足軽と富山藩士が城下での盆踊りの際に喧嘩となり、その富山藩士や本多家の関係者が切腹となった事件がある。藩政初期の喧嘩騒動の



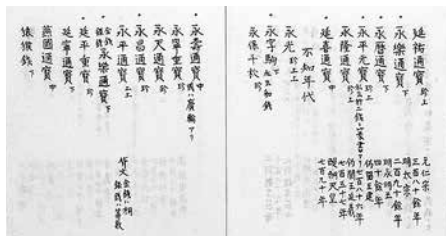
藩主利次、拝領祈儀請取につき礼状
(浅野家文書 富山県公文書館蔵)

物語を集録した「慶安奇聞」には、明暦二年（一六五六）に利次お気に入り
の小姓の間で刃傷沙汰が発生し、関係者九人が死亡、一二人が負傷したとある。

二代正甫（一六四九年生・一七〇六年没 一六七四〜一七〇六年藩主）

前田正甫は、初代藩主利次の第二子として生まれた。生母は家臣柴田氏の
養妹で、出生後に家老の近藤善右衛門に預けられ、養育された。延宝二年
（一六七四）、正甫が二十五歳の時に父利次が急死したため跡を継いだ。

正甫が藩主となった頃、水害や日照りが続いた。延宝三年には三月と四月
に城下で大火があり、城の一部や富山町の多くの建物が焼失した。これまで
の借財が巨額になったため新たな借り入れができず、家臣へ知行高五分免借
知が申し渡された。また、延宝九年には越後高田藩松平家の御家騒動が発生し、
松平家は改易となった。富山藩に高田城請取の命が下り、正甫は四三五〇人
余りを率いて高田に出兵し、無事に任務を果たした。この出兵は予想外の出
費となり、富山藩の豪商吉野屋から献金を受けた。これらから正甫は藩の出
費を抑えるとともに、新しい産業で藩の収入を増やす政策を実施した。



「化蝶類苑」(富山県立図書館蔵)

たとえば、たたら製鉄の技術者を但馬から招き、野積谷での採掘と製鉄に
取り組ませたが、成果はそれほど多くなかった。また、青貝細工の職人も京
都から招き、漆器の生産を進めた。さらには江戸時
代以前からあったといわれる越中の薬種商に注目し、
薬の生産と販売を盛んにしようとした。全国どこで
も販売ができるように取り計らったのも正甫といわ
れる。正甫は巨軀を誇り、若いころから武術や水泳
の鍛錬を怠らなかつたとされているが、比較的病身
であつたらしく合薬（製薬）の研究も行っていた。
このことが、薬に注目した理由の一つと考えられる。
しかし、元禄九年（一六九六）には幕府から江戸
の増上寺の造営助役が命ぜられ、同十一年には富山

藩の浅草下屋敷が類焼するなど出費がかさみ、藩札（銀札）を発行すること
になった。

忠義の士を好んだとされる正甫は、藩士と城下の町人の気風を高めるため
に富山城の修築を行い、城の西の磯部村には「磯部の御庭」と称される大規
模な庭園を建設した。また、富山町山王社の祭礼を藩主公認のものとした。
正甫は薬の研究に取り組む一方、古銭収集に打ち込み、「化蝶類苑」「化蝶定
階」の著書があり、和歌の腕前も確かだった。また、武術の訓練にいそしん
だ正甫らしく、狼が人を害したと聞き自ら山中に入り狼三匹を仕留めている。
しかし、貞享二年（一六八五）以降に生類憐みの令が出されると一転して生
物虐待を禁止した。

コラム 城と書状

江戸時代以降、日本の城は軍事的な役割が薄れ、各大名の権威の象徴
や各地域の政治拠点としての意味合いが強くなる。最初の富山城は天文
十二年（一五四三）に戦国武将神保長職によって築かれた。その後、上
杉氏や一向一揆、織田氏によって争奪され、佐々成政が城主となったが、
豊臣秀吉と争った成政は降伏し、富山城は破却された。越中国が前田家
に与えられると、前田利長が隠居城として整
備した。しかし、建物の主要部を焼失したた
め利長は高岡城に移り、富山城は一国一城令
により廃城となった。富山藩が成立すると、
初代藩主前田利次は富山城を仮城として入城
し、結局そのまま居城として修復し、城下町
を整えた。

藩主の書状とは、その権威と、家臣との主
従関係を確認・強化する性質を持つ。なかで
も知行宛行状は、武家社会での主従関係の要
をなし、最も重みのある文書形式が用いら
れた。また、藩主から家臣へ下された花押や印
判入りの各種の書状などの直筆の文書は、家
臣の忠誠心や藩主の権威付けに大いに役立つ
たと考えられる。藩主からは意外にもこまめ
に家臣に札状が下されている。



二代藩主正甫、亡父遺知百五拾石宛行状
(半田家文書 富山県公文書館蔵)

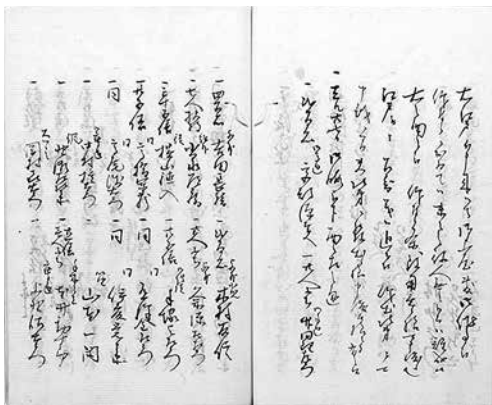
二、十八世紀前半の藩主 三代利興・四代利隆・五代利幸

三代利興（一六七八年生・一七三三年没 一七〇六〜一七二四年藩主）

三代藩主前田利興は、二代藩主前田正甫の二男として富山に生まれた。宝永三年（一七〇六）に家督を相続した。利興は藩主となって間もなく、財政再建のため、一部藩士の知行高を削減し、六〇余名の藩士や芸能者に暇を申し渡した。同四年には幕命に従い、藩札の発行を停止した。同五年には、藩士の出張の往復時の供人制限や出張行程と旅費の節約、家督相続の見直しを進め、郡方には五ヶ村組を定め年貢滞納処罰の連座制を強化した。また、鮎の繁殖を図るため子鮎釣りを禁じた。町方に対しては同六年には奢侈禁止令を出し、享保五年（一七二〇）にはたばこや醤油などの商品への統制令を出すなど改革に取り組んだ。

しかし、利興治世の時代は天候不順が続き、風水害による凶作が相次いだ。そのような中、宝永四年には幕府から富士山噴火の砂除金、正徳三年（一七一三）には芝増上寺の普請手伝を命ぜられ、翌四年には富山城本丸の焼失があり、その復旧や災害対策などで藩の支出は減らなかった。世情も不安定で、宝永五年には放火の警戒を、享保五年には盗賊取り締まりの強化と捜査への協力を命じた。また、宝永五年には藩士の印切手の偽造により藩士二名が打首、磔刑となった。

利興は享保八年正月晦日以来、土蔵に籠り誰とも会わず、参勤を欠怠するようになった。引きこもった原因は分かっていない。参勤を欠怠するという



簡略につき暇下される人名書上
（『随筆』十一巻 富山県立図書館蔵）

行為は、行跡の悪い藩主と認識され、お家存続の一大事という大きな問題となる可能性があり、富山藩はもとより宗藩の加賀藩も巻き込んだ騒動となった。結局、利興は隠居し、家督を実弟で養子の利隆に譲ることとなった。結果として、利興の隠居騒動は、いわゆる「主君押込め」にあたるとする説もある。

コラム 前田利興と鱒のすし

富山の駅弁といえば「鱒のすし」だが、その起源は、江戸時代の「鮎のすし」といわれている。三代藩主利興のとき、享保二年（一七一七）に幕府へ鮎のすしが献上され、將軍吉宗が食したといわれる。鮎のすしは藩士の吉村新八が作ったものを利興が食したところ大変美味だったため、献上することとなったという。作り方は、鮎を二十日ほど塩漬けし、酒で洗って塩出ししてから米飯と塩に十二日間ほど漬け込む。そして、提供する前日に取り出して新しいご飯に塩と酒で味付けして鮎と一緒に出すというものである。二代藩主正甫に「鱒鮎」が献上されている記録もあるもので、「鮎のすし」と似たような製法の「鱒のすし」もあったと考えられる。

私たちがよく知る「鱒のすし」が富山県を代表する特産品として全国的な知名度を得たのは鱒寿司の駅弁による所が大きい。明治四十一年（一九〇八）、富山駅開業にあわせてホテル経営者の源金一郎が現在の形の「鱒のすし」の販売を始めたのが最初である。神通川の豊かな恵みから江戸時代の「鮎のすし」や「鱒鮎」が生まれ、その伝統の上に現代の「鱒のすし」が存在するのである。



現在の鱒のすし

四代利隆（一六九〇年生・一七四四年没 一七二四〜一七四四年藩主）



四代藩主利隆、父知行三百石宛行状
(浅野家文書 富山県公文書館蔵)

よる政治判断によって実施されたと考えられている。

享保十二年には諸事簡略の触れを出し、五千石の米を新たに納めるよう命じた。同十六年から銀札を発行したが、元文元年（一七三六）に停止した。また、税滞納で破産した百姓の借金取り立てのために五ヶ村組の連帯責任を強化した。しかし、財政改善は進まず、借財返済のやり繰りにすら苦勞した。元文二年には幕府より寛永寺の補修を命じられ完工したものの財政状況は悪化した。同六年には西猪谷関所を通過する物資への役銀取り立てを強化したが、なかなか財政は改善されず、延享元年（一七四四）利隆は五十五歳で生涯を閉じた。

三代藩主利興の隠居をうけ、四代藩主となったのが、前田利隆である。利隆は二代藩主前田正甫の五男として富山に生まれ、享保九年（一七二四）に

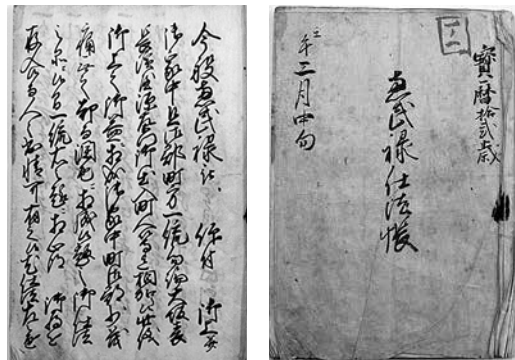
利興の養子となり家督を相続した。利隆は精勤の評判があつた不破平太夫などに加増し、田中宇右衛門や医者・辻意川などを新たに召し抱えた。翌十年には戸田七郎兵衛や和田庄左衛門などが加増され、多くの藩士が役を上げられるなどの恩恵に浴した。これは藩財政が改善したからではなく、増税や運上金、藩札発行と取り消し、新田開発など藩士や領民への負担が増しているところに、先代藩主の隠居騒動があつたため、藩主の権威向上のため家老に

五代利幸（一七二九年生・一七六二年没 一七四五〜一七六二年藩主）

延享二年（一七四五）二月、前田利隆の跡を継いだのが、利隆の長男利幸である。利幸は、父利隆の時代に悪化した藩財政を再建するため、さまざまな政策を実施した。

延享二年八月には、特産品生産のため、蠟を採取するための薩摩燼の苗を主に畑作を行う山間部の村々に植え付けさせた。同年閏十二月には加賀藩領の射水郡放生津などからの魚荷を取り締まり、宝暦八年（一七五八）には農具、仏具は高岡の鋳物師ではなく、富山金屋町の鋳物師から買い付けるように奨励し、藩外への通貨流出を減らすうとした。また、延享年間から宝暦年間にかけては、諸産業の株仲間の結成を認め、宝暦四年には米以外の物価の一五%引き下げを命じ、同九年には大豆や材木などの他国への移出を禁止するなど物価の統制にあつた。しかし、藩や藩士の財政は改善されず、寛延四年（一七五二）には家中救済のため町方からの借金・借米の返済を十五年賦としたほか、宝暦九年には町方からの借入銀の返済を延期した。起死回生の一手として、宝暦十二年に大坂町人長浜屋源左衛門と協力して富突を活用した惠民禄仕法を実施した。これは毎月六貫匁の頼母子講に強制加入させ、以後八年間は上納金や上納米は課さないというものだったが、翌年に日光東照宮修理の手伝い普請を課されたこともあって中断し、掛け金は支払われなかった。利幸も惠民禄仕法を定めた後、三十四歳の若さで亡くなった。

また、宝暦八年に京都の尊王論者が処罰された宝暦事件に伴い、前藩主利隆の弟前田利寛、射水郡小杉町出身の勤王家藤井右門らが事件の首謀者竹内式部との関わりを指摘され蟄居処分となった。



惠民禄仕法帳
(高浪家文書 富山県公文書館蔵)

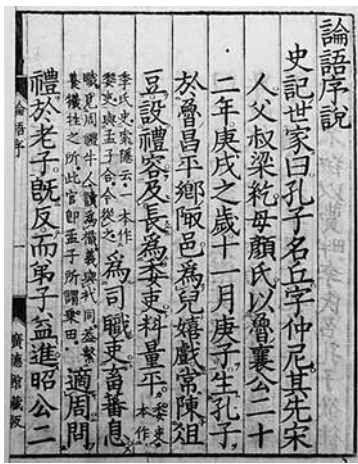
三、十八世紀後半の藩主 六代利興としとも・七代利久としひさ・八代利謙としのり

六代利興（一七三七年生・一七九四年没 一七六二〜一七七七年藩主）

六代藩主前田利興は、四代藩主利隆の四男として富山に生まれた。はじめ前田内膳の養子となるが、宝暦十二年（一七六二）、五代藩主利幸が病気になる、利幸の嫡子隆丸（のちの七代藩主利久）が幼少だったため利幸の養子となり家督を継いだ。

藩主に就いて間もない宝暦十三年、富山藩は幕府より日光東照宮修復手伝いを命じられる。これにより、前藩主のもとで実施されていた惠民禄仕法は中止になった。富山町中へは上納銀が命じられ、加賀藩からの助成も行われた。さらに、この年の家臣への知行をすべて借り上げるなどして一三万両を都合し工事を完工した。利興も自ら工事視察として日光に向いた。

明和年間（一七六四〜七二）以降、利興は諸産業の株仲間を奨励し、取引の許認可を与えることで運上金を納めさせた。このころ盛んになってきた売薬についても、明和二年（一七六五）に薬種改を設置し、翌年には反魂丹口銭取立役を設けて上納銀の増大に努めた。同年には家中、寺社、町方、郡方に翌年よりの人別銭を課した。また、水害対策として、常願寺川左岸に松を植えることを命じた。現在は殿様林として知られ、七〇本ほどが往時を忍ばせている。庶民への負担が続く中、物価の上昇も相まって、同九年には困窮



「論語集註 廣徳館本」
(岡崎家文書 富山県公文書館蔵)

した町人たちが、富山中野町の九兵衛家などを打ちこわした。藩は上納銀免除の触れを出してようやく騒ぎを鎮めた。明和年間には庶民にとって厳しい時代だったが、同三年には人形芝居が許可され、富山勸進相撲もこの頃より始まり、



六代藩主利興隠居、利久家督相続につき触書
(高堂家文書 富山県公文書館蔵)

庶民の大きな楽しみとなった。安永二年（一七七三）、時期尚早との声がある中、利興は士風振興のため藩校広徳館を創設し、藩士に儒学を学ばせた。藩校としては全国で六十二番目のものであり、宗家加賀藩の明倫堂より二十年早い創設である。学頭には江戸の昌平黌より三浦瓶山を招き、藩校の成績によつて昇進にも影響する制度を作った。

当時の藩士たちの様相はあまり好ましくなく、利興は士風振刷の訓示を出したり、嫁娶りの家に石を投げるといふ庶民の風習を藩士が行つてゐることを咎め、禁止したりしていた。利興は、特に学問によつて忠孝の道を学ぶことが大切であると考えており、文武に不精の者は容赦なく「永之御暇」をとらせるとして、強い意志を示したのである。

安永二年秋には、飛騨高山を中心に発生した大規模な百姓一揆、いわゆる飛騨騒動に対して、幕府の命に従つて出兵し、国境の片掛・蟹寺村に兵を置いて警戒させることになった。安永四年には、幕府から甲斐国の河川工事を命じられ、財政は悪化する一方だった。このような中、利興は持病である脚の病気が悪化し隠居して藩主の座を譲ることとなった。

七代利久（一七六一年生・一七八七没 一七七七〜一七八七藩主）

七代藩主前田利久は、五代藩主利幸の長男として富山に生まれた。父利幸が死去した時は生まれて間もなかったため、家督は叔父の利興が継いだ。宝暦十三年（一七六三）に利興の養子となり、安永六年（一七七七）隠居した

利與の跡を継いで藩主となった。

藩主就任以来、財政難に苦しんだ。家督統続の大札や叙位に必要な費用にも事欠き、安永八年には郡方の上免米（増税分の米）を課した。翌九年には、清水村に浄瑠璃や歌舞伎を演ずる常設の芝居小屋の建設を許可した。この芝居小屋は庶民文化の発信地となった。天明元年（一七八一）には、鳥類の巢を破壊することを禁止し、嫁娶りの際の投石の旧弊を厳禁した。天明年間（一七八一〜一七八九）に入ると、家中からの借知や知行の減免、郡方への上免米、町方・郡方への人別銭、家中や町方、寺院に地子銀を課した。

コラム 売薬と藩財政

富山の売薬が、組織的に発達するのは江戸時代の中期以降といわれている。富山藩の目玉産業の一つと考えられていたものが、室町時代からあったとされる製薬だった。有名な反魂丹は、二代藩主正甫が自ら薬の研究に励む以前から富山に伝えられ、製造するようになったと考えられている。正甫は、領内で生産した薬を藩外へ売り出すことを奨励した。江戸城で腹痛に苦しむ他藩の藩主に正甫が反魂丹を飲ませ、効き目に驚いた諸国の大名が富山売薬の行商を懇願するようになったというエピソードがあるが、富山藩の公式文書には記述はない。

十八世紀になると、藩は売薬業者を保護するかわりに、運上金や諸役金を納めさせた。「先用後利」と呼ばれる独特の商法を用いて利益を伸ばすには、売薬商人たちの高いモラルと行政による統制が必要だったからである。特に明和から天明年間以降は、藩財政難への寄与策として統制が強化された。さらに、富山藩は文化十三年（一八一六）に、「反魂丹役所」を設置し、薬を藩の名品として保護育成した。売薬業者からの運上金や諸役金は、深刻な藩の財政難を完全に克服することはできなかった。一方、藩財政の一端を支えた売薬業者は、明治になると有力な資本家として活躍し、富山の産業発展を支えた。



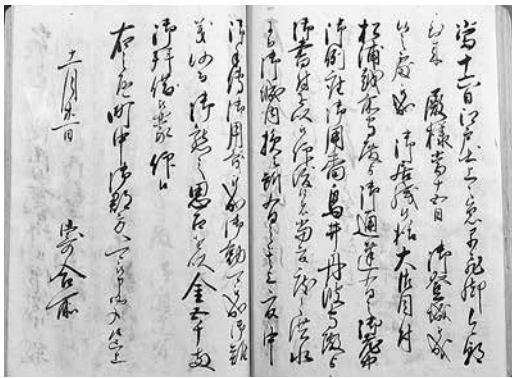
現在の売薬

全国的に飢饉に見舞われた天明三年、富山藩では閏六月に常願寺川、神通川が決壊する大洪水となり、城の南側大手橋の上一メートルまで水が達し、富山城下は大半が床上浸水した。流出家屋は四五〇戸、損壊戸数は約一九〇戸にのぼった。江戸でこの知らせを聞いた利久は在国の加賀藩主治脩（はるなが）に援助を請うよう指示した。その後、帰藩した利久は自ら被災地を巡察し、堤防や水門を作らせるなど復興に努力した。

天明六年には財政再建策として「天明の御改法」を出し、収支のバランスを図ろうとした。また、翌七年には贅沢品を禁じるなど改革に努めたが、同年八月二十七歳で亡くなった。かつて江戸城において、同列の大名の小刀が抜け落ちようとしていた時に、懐紙で飯の留め具を作り、小刀が抜けないようにしてその大名のピンチを救ったエピソードも伝えられており、機転の利く人物だったようである。

八代利謙（一七六七年生・一八〇一年没 一七八七〜一八〇一年藩主）

八代藩主前田利謙は、六代藩主利與の長男として江戸で生まれた。天明七年（一七八七）従兄である七代藩主利久の養子となり、同年に利久が死去したため家督を継いだ。幼名を岩太郎・雄二郎といい、雄二郎を名乗っていた安永六年（一七七七）九歳の時には、清水定の芝居小屋を貸し切りにしてお忍びで竹田からくりを見物していたという話が残っている。



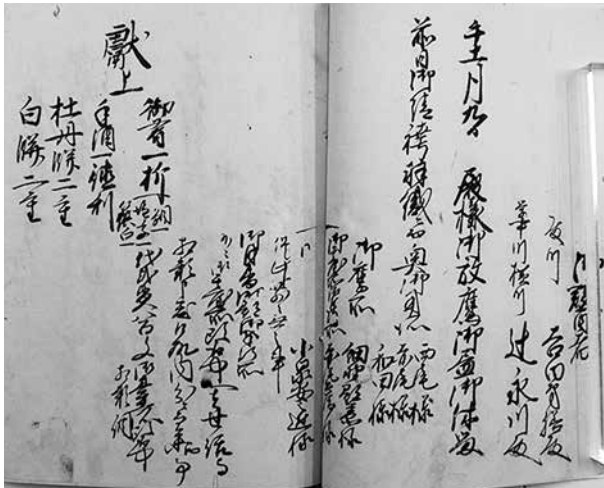
き一件 用など 入り渡り 過分の借 など御用金 伝御手金 及び家中 洪水富山 (岡崎家文書)

寛政元年（一七八九）春、富山藩は美濃・伊勢の河川工事を命じられ、御用金を上納するように申し付けられ、その工面のため加賀

藩に助勢を願っていたが良い返事は得られなかった。そのような中、夏には神通川、常願寺川などが氾濫し、富山城の堀や塀も破損した。このため藩では藩土に対して半知借上（知行の半分を藩に差し出す）を命じ、幕府からは五千両が城内の破損等に対して貸与された。

利謙が藩主だった時代は主に寛政年間（一七八九〜一八〇二）にあたる。この時期の幕府は、老中松平定信が主導した寛政の改革をはじめとする改革政治を行っていた時期であり、利謙もそれと似た政策を実施していた。寛政元年（一七八九）には淫買を禁止し、同二年には藩士の賭け将棋や囲碁を厳禁し、同八年には藩士の子弟に水練の演習をさせるなど、風俗矯正と士風振刷に取り組んだ。また、同二年には、幕府からの囲米の命令を実施するように命じた。さらに、同十年には、学問を奨励する政策の一環として、庶民出身の大野十郎を藩校の講師に採用した。寛政の改革では株仲間や専売制を廃止するなどの政策が知られている。しかし、利謙は、城下の袋町に市場を開設して諸産物の販売を促進し、寛政年間を通して株仲間などの同業者団体を認める一方、町方に各種の運上銀を課すなど重商主義的な政策も行った。

寛政七年、富山城本丸の石垣が三か所壊れたため、幕府の許可を得て修復した。翌八年には、江戸城西の丸大御奥向修繕を命じられた。これらの普請事業に対して、藩は家中に対して借知を命じ、郡方や町方に上納米や人別銭を申し渡した。また、同十三年には、



八代藩主利謙放鷹につき昼休所献立など留書
(高堂家文書 富山県公文書館蔵)

加賀粟崎の木屋藤右衛門や大坂淡路屋太郎兵衛ら三人に年貢米二万石の先売を開始した。このように様々な財政政策を実施して財政立て直しを図ったが、あまり効果は上がらず、立藩以来の財政難は、いよいよ抜き差しならない段階になり、これまでの通り一辺倒の政策では立て直しができない状況になってきた。

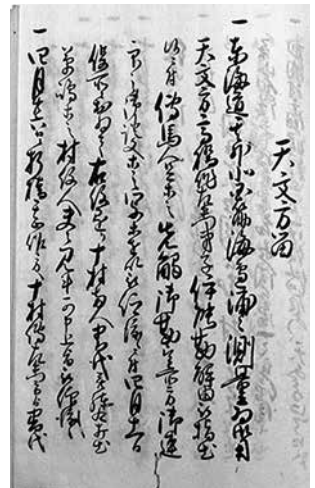
利謙は、享和元年（一八〇二）、江戸屋敷で亡くなった。享年三十五歳だった。文武両道で城の縄張り図を制作するのが得意だった。弓術、馬術、剣術それぞれ師について鍛錬に励み、鷹狩にも出かけていた。藩主の鷹狩に備えて鷹場周辺の村々には鷹場の保全のため様々な規制や諸役が課された。藩主が鷹狩に来た際には休息や食事などの対応をしなければならず、かなりの負担だった。利謙が亡くなった時、後継ぎである二男の利保が幼少だったため、大聖寺藩から迎えた養子の利幹が跡を継いだ。

四、十九世紀前半の藩主 九代利幹・十代利保

これまで述べてきたように、富山藩は立藩の時から財政難に見舞われてきた。これといった目玉産業もない富山藩にとって、多すぎる家臣団が財政難の主な原因であるとされている。各種産業への運上金の賦課や武士・町人・農民に課された人別銭、増税や家臣のリストラ、知行削減などの取り組みがあったが財政立て直しは進まず、財政破たんを避けるためにも、待ったなしの大胆な政策が必要だった。

九代利幹（一七七一年生・一八三六年没 一八〇二〜一八三五年藩主）

九代藩主前田利幹は明和八年（一七七二）、大聖寺藩の五代藩主前田利道の八男として江戸で生まれた。享和元年（一八〇二）に富山藩の八代藩主前田利謙が死去したとき、跡取りの次男啓太郎（のちの利保）は二歳の幼年だった。



子に門下留書館蔵
測量書
衛門留書館蔵
左浦など公文
橋領りな
高の懸
方解の役
天勤由
府能勤
幕伊能
(岡崎家文書)

たため、利謙の養子として迎えられ、家督を継いだ。

利幹が藩主になつて間もない享和二年に、庶民の奢侈禁止を命じ、貧民を救うための

惠民倉を設置した。翌年には幕府より関東地方の河川工事を命じられ、郡方
に上免米を課した。また、同三年八月には幕命を受けた伊能忠敬が越中の海
岸測量に訪れており、一行がスムーズに活動できるよう付き人や案内、掃除
などを村役人に命じた。文化二年（一八〇五）には防火対策として、富山城
下の各所に防火用井戸を掘らせ、竜吐水を設置した。また、同五年には幕府
より蝦夷地臨時出兵の準備を命ぜられた。実際に蝦夷地に出兵することはな
かったが、文政四年（一八二一）まで準備態勢は続いた。財政再建に向けて
利幹は、蠟を採る樫の植え付けを奨励し、役人に村回りをさせてチェックさ
せた。富山の有力町人岡田屋嘉兵衛に塩野（大久保台地）の開拓を請け負わせ、
農民にも動員を命じた。このような政策は折からの不作と人別銭や上納米の
負担と重なって農民の不満が積り、文化十年には「文化十年百姓惑乱」と呼
ばれる一揆が発生した。その一方で文政元年には藩主や重臣、近習衆の間で
蹴鞠が流行し、蹴鞠場が設置された。

財政健全化の最大の難関は、藩内で流通する藩札や手形だった。藩は、商
取引が活発化する中で、流通する貨幣量を補充する目的で町人などに請け負
わせる預かり手形の発行を始めた。この手形の信用は低く、銭札とともに正
貨への引替えが殺到すれば恐慌になりかねなかった。しかし、藩は文政二年
に町方に対して銭札二〇万貫を申し付けた。さらに、火災の被害に遭つた江
戸屋敷や富山城の復旧費用が発生し、折からの不作続きのため、藩は新たな
藩札の発行に踏み切った。藩札の相場が下落する中、天保四年（一八三三）



石田小右衛門の藩政改革の演説による領民の金米献上満足、一層の俸約勉勵につき直命趣意書
(高堂家文書 富山県公文書館蔵)

四月、藩は旧銭札の新銭札への切り替えを命じたが、新札の価値が低く恐慌が発生した。翌五年、制限外の藩札を發行した疑いで家老蟹江監物ら二三名の家臣が処分された。これまで様々な財政政策を

行つてきた富山藩だが、天保五年段階での累積借入高は三〇万両に達してい
た。藩は諸藩の財政立て直しを指導して成果をあげてきた西本願寺の家司石
田小右衛門の派遣を要請した。小右衛門は天保四年十月、同五年四月、同六
年二月と来富し、改革にあたった。天保四年の来富時は連日領内を巡回して、
領民に藩主の恩を説いた。真宗門徒の多い越中では金銀米穀を献上するもの
が続出した。利幹はこれを喜び、「直命趣意書」を発表して家中・領民の改
革への協力を感謝した。しかし、財政の改善は進まず、藩への支援を表明し
ていた民衆の熱も醒めていった。文武両道に励み、鉄砲や鷹狩に打ち込んだ
利幹だったが、藩財政が悪化する中、天保六年十月、病気を理由に隠居し、
翌年亡くなった。

十代利保（一八〇〇年生・一八五九年没 一八三五〜一八四六年藩主）



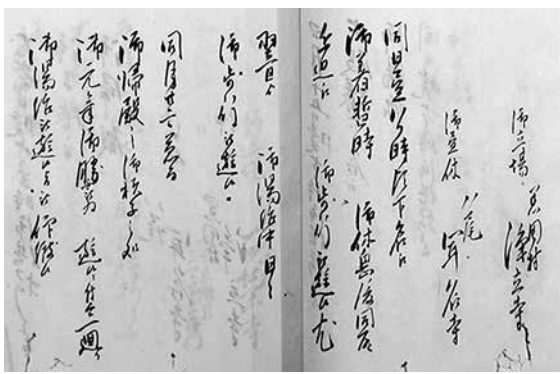
前田利保像
(富山市郷土博物館蔵)

十代藩主前田利保は、寛政十二年（一八〇〇）、八代藩主前田利謙の次男として江戸で生まれた。享和元年（一八〇一）に父が死去したときには二歳だったために家督を継げなかつた。文化八年（一八一二）、九代藩主

利幹の養子となり、天保六年（一八三五）、利幹が隠居したため、家督を継いだ。

利保治世の時代は、幕府が天保の改革を実施した時期にあたり、富山藩政の最も困難な時期に藩主となった利保も改革に取り組んだ。しかし、天保七年は大凶作となり、翌年には餓死者も出た。利保は大坂への廻米を中止させ領内を巡視した。この凶作以後、利保は殖産興業に力を入れ始めた。天保八年には城内の一角に産物方役所を設置し、陶器、漆器、織物、和紙、丸薬の生産に力を注ぎ、甘蔗や漆、茶、葉草などの商品作物の栽培を奨励した。

財政面では、天保九年、財政改革の成果が上がらなかったため、家老の近藤丹後らを処罰し、飢饉があつたにも関わらず郡方に対して二千石の上納を五年間命じた。翌十年には、火災で焼失した江戸城西の丸の普請手伝金二万五千両を幕府から課され、町方と郡方へ米・金の上納を命じた。この甲斐あつて、天保十二年に予定されていた利保の参勤は免除された。同十四年以降は制度改革を行い、町人や百姓から武士になった者を元の身分にもどした。さらに、家中には最低三か年の半知借上を命じ、町方からも軒別上納金を課した。前年十三年の奢侈品の禁止に続き、家宅の建築や装飾についても制限を設け、同十五年には花火を禁止した。加えて本百姓体制の維持を図るため、御改正趣意書を出して百姓の質入高を年賦返済とした。これらの他にも藩内の商業や流通を統制し、外国船襲来に備えて海防の強化や、藩校広徳館の改革を行い、文武奨励のため「履校約言」を著した。様々な改革に取り組んだ利保だったが、



十代藩主利保の下名湯治につき休所など様子覚
(高堂家文書 富山県公文書館蔵)

弘化三年(一八四六)病気を理由に隠居し、六男の利友に家督を譲った。隠居した利保は度々城外へ出かけた。持病のために隠居を申し出たため、嘉永元年(一八四八)以降、幕

府の許可を得て病氣治療のため領内の八尾にある下ノ茗温泉に湯治に出かけた。また、本草学・博物学に打ち込んでいた利保は、隠居後の嘉永六年には家臣を引き連れて西白木峰(金剛堂山)に登り植物を調査した。江戸在府中には本草の愛好家を集め本草学サークル「楮しやべんかい鞭かひ会」を主催し研究に精を出



利保公御筆
(藤田家文書 富山県公文書館蔵)

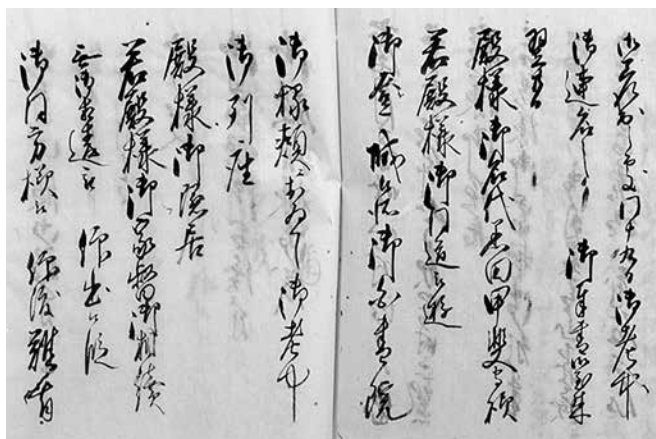
した。富山城の東北に隣接した地域に建設した能舞台を持つ広大な隠居住まい千歳御殿には、各地の珍しい草木が栽培された。東田地方村にも葉草園を設け、葉草・薬石を集めて薬品会を開き、売薬商人に命じて集めた諸国の物を陳列して家臣に縦覧させた。これらの本草学の研究は『本草通串』や『本草通串証図』など三〇あまりの著書にまとめられている。

江戸在府中に宇田川榕庵などから蘭学を学んだ利保は、西洋医学にも理解が深かった。ジェンナーの種痘法の伝来を聞くと藩医の横地元丈を江戸に派遣して技術を習得させた。学問以外にも武芸にも励み、和歌や能楽にも優れていた利保は富山藩主の中でも傑出した文化人といえる。

五、十九世紀中頃の藩主 十一代利友・十二代利聲・十三代利同

十一代利友(一八三四年生・一八五三年没 一八四六〜一八五三年藩主)

十一代藩主前田利友は十代利保の六男として江戸で生まれ、弘化三年(一八四六)、利保が病のため隠居したため十三歳で家督を継いだ。まだ若年で病弱であつた利友の治世は、隠居の利保や利保の側室であつた利友の生母毎木や江戸詰め家老の富田兵部などの家臣団が藩政を後見することで運営さ



前田利友家督相続につき御扶持人より長百姓まで
郡役所出頭の恐悦申上次列覚
(高堂家文書 富山県公文書館蔵)

対して五年間三分の一の借知を命じ、同時に町方、郡方の富豪に莫大な上納金や上納米を課した。嘉永元年（一八四八）に金札を発行し、家中や町方、郡方に月一割の高利で金札を貸与した。商業統制政策として、嘉永元年に反魂丹場所の権利売買の際に手数料を納めさせ、大物商の株仲間を設置した。同三年には、紙は領内で生産したものを使うよう達し、特定の商人に弁柄・緑簪の納入と取次を認めた。同六年には株を持たない飴の小売人の販売を禁止した。さらに寛裕講の名目で家中や町方、郡方から金銭を徴した。しかし、嘉永二年には利保の隠居所千歳御殿が竣工し、同四年には幕府から日光東照宮の修繕費を課され、同五年には天保二年（一八三一）に焼失した大手門と櫓門を再建するなど支出が続いた。財政再建が進まない中、嘉永六年、利友は二十歳の若さで亡くなった。歴代富山藩主の中で最も短い生涯だった。

れた。毎木は江戸の生まれで、利保に見初められ側室になると、元の名であった梅の文字を崩して毎木と称した。利保と共に江戸と富山を行き来して五男一女を成し、このうち利友と利聲の二人が藩主の座に就いたことから、政治に介入するようになった。

利友は父利保をはじめとする周囲の支えを受けながら財政再建に取り組んだ。しかし、弘化四年に家中に

十二代利聲（一八三五年生・一九〇四年没 一八五四〜一八五九年藩主）

十二代藩主前田利聲は、天保六年（一八三五）、十代藩主利保の七男として江戸で生まれた。嘉永六年（一八五三）、同母兄で前藩主の利友の養子となり、十二月に兄が死去したため、嘉永七年二月に家督を継いだ。出生以来多くの時間を江戸で過ごした利聲は江戸詰め家老の富田兵部を重く用いた。

同年三月には藩内で生産される瓦の使用を奨励するなど殖産興業の姿勢を見せていたが、翌安政二年（一八五五）二月に富山町に燃え広がった大火に出ばなをくじかれた。復興のため利聲と富田兵部ら江戸方は大量の金札の発行を命じた。そのため金札の信用は失墜し、正金引替所に群衆が殺到した。

翌三年春、藩は有力商人に名前入りの銀札を発行させて金札と引き換え、金札の使用を停止させた。経済混乱の中、藩は八月に開物方を設置し、無尽講の名目で家中への借上げを計画し、惣奉行に家老浅野五郎左衛門を任じた。

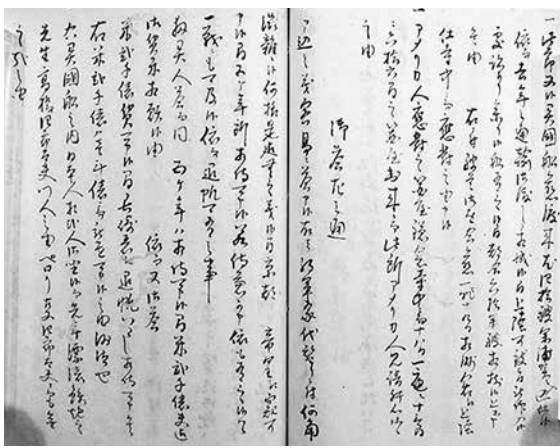
しかし、浅野は家中が困窮していることを理由にこれを布達しなかったため江戸方は、浅野に代わって堀田貫兵衛を家老格で開物奉行に任じて派遣することを富山へ伝えた。これを知った利保は、浅野が引き続き家老を務めると江戸へ連絡し、この件はおさまった。しかし、三割借上げの無尽講は強行された。これに反対する富山在住の家臣は多く、藩財政をめぐる江戸派（利聲及び富田兵部ら）と富山派（利保など）の対立は明らかだった。

同三年十二月、加賀藩主前田斉泰の命を受けた嗣子の前田慶寧と、利聲が二度にわたって面談し、慶寧は利聲の親不孝を厳しく論じた。これは利保が利聲と家臣団が困難な状況にあることを加賀藩主前田斉泰に知らせたことに始まった。翌四年三月、前田斉泰は利保と利聲に使者を遣わし、病気のため利聲を隠居させ、利保が政務を執ることを申し渡した。利聲は四月に外出停止となり、老中阿部正弘の息女との婚約も年末に破談となった。利保は加賀藩へ役人の派遣を要請し、加賀藩は富山藩家老の会議に出席し、見聞した内容を加賀藩へ報告することを任務とした横目を派遣した。

富田兵部は、四月に命じられて帰国の途にいたが、二十三日富山城下に

入るや駕籠の中で割腹し果てた。藩は次いで、家老堀田貫兵衛や勝手方奉行、町奉行など計五一名に及ぶ藩士を処分した。その中には兵部と不義が噂された利聲の母毎木も含まれていた（毎木は七月七日に死去）。「富田兵部一件」と呼ばれるこの事件の背景には、利保の側室毎木と富田兵部の姦通が原因とされているが、金札増発による経済混乱の責任を追及されたことが大きい。また、富田が老中阿部正弘に接近し、利聲と阿部正弘息女を結婚させて富山藩前田家を譜代大名とし、天領であった飛騨高山五万石を富山藩領にして藩財政を立て直し、自らはその代官になろうとしたことを加賀藩が察知し、利保に糾弾を命じたためともいわれている。

再び政務を執った利保は、安政四年八月に家中に対して儉約に努めるよう命じるとともに五年間の半知借上を申し渡した。同年九月には経世家佐藤信淵の息子佐藤昇庵の献策を受けて漆の植樹を進めた。しかし、翌五年二月二十五日に大地震が起き、三月十日と四月二十六日に地震で形成された常願寺川上流の自然ダムが決壊し、下流一帯の富山・加賀両藩領の家屋を押し流した。一方、富山藩は嘉永年間から海防の強化を進めていたが、安政六年四月には異国船が四方沖を通過する事件が起きた。これに対して



異国船再渡来につき諸達覚
(高堂家文書 富山県公文書館蔵)

藩は西猪谷と切詰の番所を厳戒下に置き、海岸警備の強化を命じるなど、迅速な対応をとった。六月になると利保は加賀藩に、病氣療養として利聲を隠居とし、加賀藩主斉泰の九男桐松（後の利同）を後継ぎとしたいと願い出た。

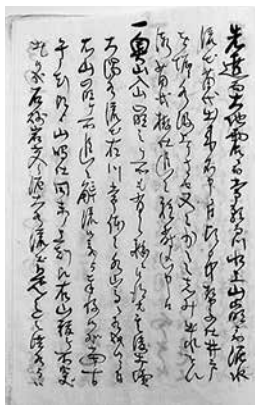
安政六年八月、利保は病が重くなり、十八日に亡くなった。

九月には家老富田讃岐は藩内の分裂がお家騒動に発展することを恐れ、加賀藩からの役人派遣を願い出た結果、十月下旬に家老として津田内蔵助が派遣された。同年十一月、加賀藩主斉泰は、当時三歳だった桐松の養子を許可し、幕府も利聲の隠居と桐松の養子及び家督相続を認めた。十一月二十二日、利聲は利同に藩主を譲って隠居した。利聲の藩主在位は丸六年に満たず、富山藩主の中では最短期間だった。

コラム 安政の大地震

安政五年二月二十六日、越中・飛騨の国境近くの跡津有峰断層を震源とする、推定規模マグニチュード六・八の大地震が起こった。この地震で富山城が破損し、城下の町でも地割れや液状化現象、家屋の倒壊などがあつたが、大規模な火事は発生しなかった。一方、立山カルデラの火口壁が大鳶山・小鳶山もろとも崩れ落ち、常願寺川は上流でせき止められた。加賀藩よりこの情報を聞いた富山藩は二月二十八日に呉羽山方面への避難を命じ、利聲、利保ともに避難した。三月十日と四月二十六日にこの自然のダムは崩壊し土石流が下流を襲った。富山藩領の水付村は三三か村、富山町の水損は流出家・潰家一二軒、半壊家三三軒、床上浸水二二三九軒、床下浸水五五四軒だった。

富山藩の対応は地震発生直後の情報収集からして出遅れており、飛騨街道の復旧工事についても、飛騨側から強く依頼されて着手した。当時の富山藩は慢性的な財政難が悪化し、政治も不透明な状況だったため、復旧が進まなかったと考えられる。実際の洪水後の被害調査や被災者に対する救済では、十村が果たした役割が大きかった。



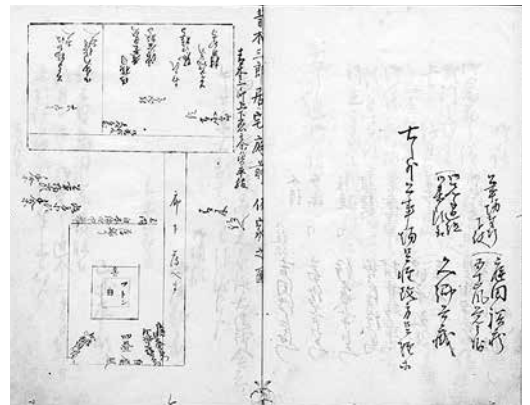
大地震による常願寺川洪水のため用水被害見分につき申上書
(佐伯家文書 富山県公文書館蔵)

十三代利同(一八五六年生・一九二二年没 一八五九〜一八七一年藩主)

最後の富山藩主十三代前田利同は、加賀藩十三代藩主前田齊泰の九男として江戸に生まれた。安政六年(一八五九)、十二代利聲の養子となり、同年十一月に家督を継いだ。歴代の富山藩主の中では最年少の三歳で藩主となった。まだ幼少のため、十一月に富山藩へ派遣された加賀藩家老津田内蔵助が藩政を指導することになった。同七年正月に町奉行所より加賀藩からの指示に従うことが町年寄へ申し渡されている。利同は同七年一月二十一日に江戸の加賀藩邸から富山藩邸へと移り、これに伴い同年より六年間加賀藩は富山藩へ毎年五千両ずつ助成することになった。

加賀藩支配下で富山藩は次々と懸案事項に取り組んだ。文久元年(一八六一)三月には、家中へ知行高百石に付き十五両の貸付を行った。また、砺波郡十村荒木平助と射水郡十村折橋九郎兵衛が着任し、富山藩の十村を指導した。同年四月、無尽講として実施してきた積金講は掛け金を三十年賦で返却し、寛裕講は調達米の返済に充てることを申し渡した。同年七月には、四方に御台場用地を取得し、十二月には、安政三年に回収した金札の残りを廃棄し、調達金は天災等のため返済できないと申し渡した。また、郡方頼母子一厘上納金を勘定所へ差し出すよう命じた。八月に東海道筋の河川工事のため一万二千両の納入を幕府から命ぜられたため、町方へ五匁、郡方へ八匁の上納金を三年間軒別に賦課した。翌二年三月には細入・山田谷での硝石製造、六月には漆木の植樹と種痘所の設置を申し渡した。このような中、加賀藩から派遣されていた家老は、同年八月に政治状況も安定し財政再建の手立ても整ったとして加賀藩に引き揚げ、以後は家老が出役として巡視することとなった。

加賀藩家老が離任した後の富山藩では、時勢に対応すべく塩硝の製造奨励や銃卒の取り立てなど軍事強化策が目立った。現実路線の改革派が台頭し、軍備の充実と藩政の改革に乗り出していたのである。そのリーダーが下士から累進して家老職についた山田嘉膳だった。山田と対立して年寄の指導的地



島田勝摩・山田嘉膳之一件
(前田文書 富山県立図書館蔵)

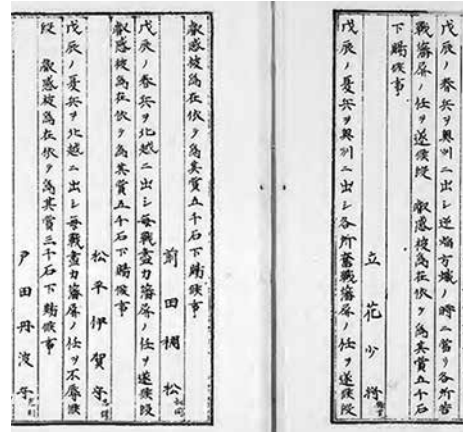
正月から金沢で詮議され、三月二日預けられていた青木三郎邸で切腹した。この事件の直後、加賀藩は富山藩に出役していた家老を富山御用主附に任じ、以後、この形での加賀藩の指導体制が明治元年(一八六八)六月まで継続された。また、事件に直接関係しなかった林らは、今度は改革派として進出し、滝川を排斥した。慶応元年から三年(一八六五〜六七)にかけて改革派は藩校広徳館の学則改正、新調組の組織などの政策を実施し、慶応元年には江戸や長崎へ藩士を留学させ、林太仲も長崎に出向いた。

慶応三年十月十四日、將軍徳川慶喜が大政奉還を申し入れ、十二月九日には王政復古の大号令が発せられた。朝廷側につくか旧幕府側につくか混迷を重ねた加賀藩と富山藩は朝廷側につくことを決意した。翌四年一月七日、朝廷は徳川慶喜追討令を発し、全国の諸藩を従わせるため鎮撫総督を各地に派遣した。北陸道鎮撫使も三月十日に富山一番町の本陣に着き、利同は御機嫌伺いのため本陣を訪れた。四月十八日、富山藩に出兵が命じられ、閏四月十四日、富山藩隊四四三名が越後へ向かった。越後高田に集結した官軍は四月二十七日より旧幕府軍との戦闘に入り、四か月の激闘の末、八月中旬越後平野を平定した。この戦いでは兵站基地としての富山藩の役割も大きかった。



前田桐松、版籍奉還上表
(公文録 国立公文書館蔵)

寺院を一宗各一寺院に合併させた。武器製造のために、領内の寺院や士族の所有する燭台、香炉、火鉢などの金物を没収し、合寺のため空き家となった寺院は火薬製造所などになった。これらの改革は多



前田桐松の北越戦功により賞典録五千石下賜
(太政類典 国立公文書館蔵)

明治元年（一八六八）十一月九日朝廷は富山藩兵に奥羽越からの帰兵を命じ、出陣していた兵が続々と帰藩した。富山藩や富山町はこの戦に大きな役割を果たし、明治二年六月、藩主利同は北越の戦功によつて賞典禄永世五千石を下賜された。

明治新政府は中央集権体制の確立を指向し、明治元年十二月

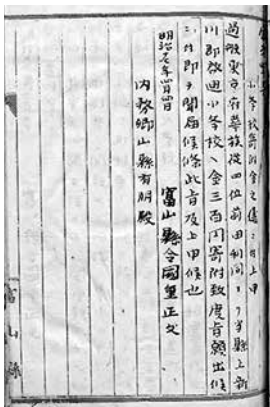
二十八日、「藩治職制」を定めた。これを受けて富山藩でも翌二年一月に家老などの役名を廃し、執政・参政などの職名を設けた。さらに新政府は版籍奉還を進め、富山藩でも六月十七日に藩主利同が版籍奉還を行なった。利同は知藩事に任命され、華族となった。これに従い藩は七月と十月に職制改正を行い、十月には知藩事の家禄が藩の実収高の十分の一とされたのに準じて家臣団の給禄を削減した。また、藩校広徳館を藩学校と改称し、英学校、医学所を設置した。十二月には軍制改革として常備隊を組織した。同三年九月、明治元年より富山藩貢士や徴士として藩を代表して上京し、新政府に参画していた林太仲が帰藩し、藩政大改革に着手した。藩知事利同が十四歳の幼年である状況で大参事に任命された林は、大小の政務をほとんど運営し、財政改革と新時代に対応した強兵策を目指した。十月には合寺令を発して藩内の

くの反対者があり、林は事後処理を立石大参事等にゆだね富山を去った。明治四年四月、利同と家族は東京へ転住し、七月十四日廃藩置県により富山藩は廃され、富山県となった。利同は十五歳だった。

六、廃藩後の藩主と富山

廃藩置県によつて富山藩領がそのまま富山県となり、城内藩庁跡に富山県庁が設置された。しかし、明治四年（一八七二）十一月二十日に富山県は廃止され新川県が新たに設置された。新川県の管轄区域は富山藩領を超えて、新川・婦負・砺波の三郡に広がった。県庁は魚津に置かれた。翌五年九月二十七日には七尾県に属していた射水郡を新川県に移し、旧越中国全域とした新川県が誕生し、翌六年九月には県庁が富山に移った。しかしながら、明治九年四月十八日、新川県は廃止され石川県に合併となった。これは政府の府県統合政策のあらわれであった。その後、越中有志による石川県からの分県運動と政府の思惑が重なり、明治十六年五月九日、富山県の設置が政府から布告され、現在の富山県が誕生した。

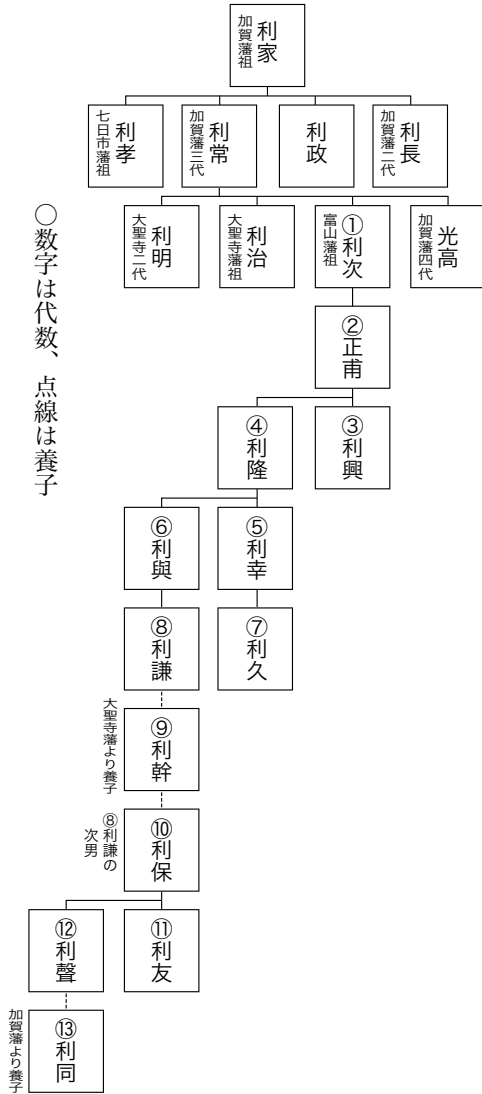
明治以後に存命した旧藩主は十二代利聲と十三代利同である。利聲は東京在任で、明治二十四年、同二十七年、同三十五年に来富し、於保多神社や長岡廟に参拝するなどしていた。明治三十七年二月、東京の邸で歴代藩主の中では最も長寿の七十歳で亡くなった。



前田利同よりの小学校寄附金
についての上申
(富山県史料 国立公文書館蔵)

十三代利同は、明治四年一月、大学南校入学を認められ、洋学を学んだ。廃藩置県後は同年十一月、留学のためパリに渡った。明治五年にはロンドンに移り、英語とフランス語、馬術を

富山藩前田家系図



○数字は代数、点線は養子

加賀藩より養子

歴代の富山藩主は、藩の財政難と戦ってきた。当初これといった産業もない富山藩は、規模につり合わない家臣を抱えて立藩の時点から財政が圧迫されていた。そのため、家中や領民、上方や飛騨の商人、宗藩加賀藩からの借財や増税、藩札の発行、売薬業の保護統制などにより、藩の政治・経済を支え、かろうじて幕末まで命脈を繋いできた。その幕末期の改革はついに藩内の分裂を発生させ、宗藩の介入を招いた。富山藩の債務は、廃藩後に大

おわりに

学び、同年十二月に帰国した。帰国後は外務省に勤め、明治十年十一月から明治十五年四月までフランス公使館に勤務した。明治十七年に伯爵となり、式部官に任ぜられた。外国使節の接伴役、天皇・皇族の供奉・随員役を務め宮中顧問官となった。その後もたびたび富山を訪れ、明治十七年には富山の小学校への寄附も行った。大正十年（一九二一）十二月、脳溢血のため亡くなった。六十六歳だった。

蔵省へ引き継がれたが、その債務は銀六〇匁を金一円に換算すると、総計六四万五五九一円であり、全国諸藩の平均三九万円を超える金額であった。これらの多くは幕府から課せられた普請費用の負担によるものとされている。財政再建・藩政改革に失敗すれば、改易などの処置にあう可能性もある。そんな中、条件に恵まれているとはいえない藩を藩主たちは手を尽くして二・三〇年余りにわたって治め、家臣や領民もそれを懸命に支えたといえよう。また、時代を彩った学問、芸能など富山の文化の形成に歴代藩主たちが果たした役割の大きさも再確認すべきだろう。

主要参考文献

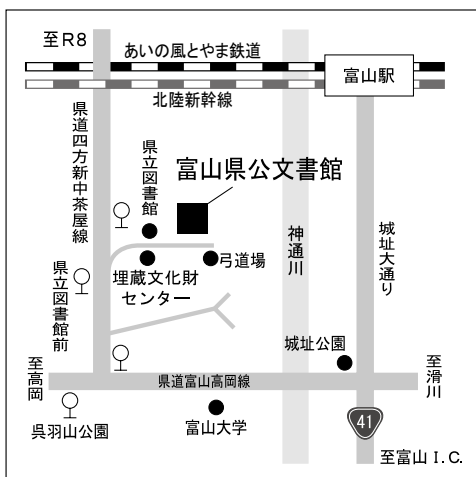
書名	編著者	出版年	発行・出版
1 『富山県史』通史編Ⅲ近世上	富山県	1982	富山県
2 『富山県史』通史編Ⅳ近世下	富山県	1983	富山県
3 『富山県史』通史編Ⅴ近代上	富山県	1981	富山県
4 『富山市史』第1巻・第2巻	富山市	1960	富山市
5 『富山市史』通史上巻・下巻	富山市史編さん委員会	1987	富山市
6 『とやまの歴史 改訂版』	富山県公文書館	2017	富山県
7 『ふるさととやまの人物ものがたり』	富山県教育委員会	2011	富山県教育委員会
8 『高校生のためのふるさと富山』高等学校郷土史・日本史学習補助教材	郷土史・日本史教材作成委員会	2018	富山県教育委員会
9 『富山大百科事典』上巻・下巻	北日本新聞社	1994	北日本新聞社
10 『お殿さまの博物図鑑—富山藩主前田利保と本草学—』	富山市郷土博物館	1998	富山市教育委員会
11 『富山藩の文化 学・芸・美—彩られた江戸期の富山—』	富山市郷土博物館	2002	富山市教育委員会
12 『富山城ものがたり』	富山市郷土博物館	2005	富山市郷土博物館
13 『幕末動乱と富山藩』	富山市郷土博物館	2018	富山市郷土博物館
14 『富山県謎解き散歩』	竹島慎二	2013	新人物往来社
15 石田小右衛門の富山藩遊説（『富山史壇』第49号）	水島茂	1971	越中史壇会
16 『富山藩政史の諸問題』（『富山史壇』第50・51合併号）	水島茂	1971	越中史壇会
17 『幕末維新期における富山藩政の動向』（『富山史壇』第50・51合併号）	栗三直隆	1971	越中史壇会
18 『満水留』の考察（その一）—寛政元年出水記録—（『富山史壇』第53号）	中村太一路	1972	越中史壇会
19 『反魂丹役所の機能と構造』（『富山史壇』第62・63合併号）	米原寛	1976	越中史壇会
20 『富山藩の藩債累積高についての考察』（『富山史壇』第73号）	田畑勉	1980	越中史壇会
21 『富山藩藩札の発行』（『富山史壇』第85号）	高瀬保	1984	越中史壇会
22 『享保年間 富山藩の危機—第三代富山藩主前田利興隠居一件と富山藩政—』（『富山史壇』第160号）	浦畑奈津子	2009	越中史壇会
23 『富山藩の震災被害と対応—安政期—』（『立山カルデラ砂防博物館研究紀要』第9号）	高野靖彦	2008	富山県立山砂防カルデラ博物館
24 平成20年度特別企画展「越中の鷹狩り—近世を中心に—」	富山県公文書館	2008	富山県公文書館
25 平成29年度開館30周年企画展「災害にみる富山」	富山県公文書館	2017	富山県公文書館

「富山藩主勢ぞろい！—初代利次から13代利同まで—」主要事項年表

年号	西暦	内 容	藩主
寛永16年	1639	富山藩が加賀藩より分藩する。	利次
寛永21年	1644	家中定書22条等を申し渡す。	
延宝2年	1674	利次が死去し、正甫が藩主となる。	正甫
延宝3年	1675	3月と4月に城下で大火。家中に知行高五分免借知が申し渡される。	
延宝9年	1681	越後高田城請け取りを命じられる。	
元禄9年	1696	増上寺の造営助役が命じられる。	
宝永3年	1706	正甫が死去し、利興が藩主となる。60余名の藩士や芸能者に暇を申し渡す。	利興
宝永4年	1707	藩札の発行を停止する。幕府から富士山噴火の砂除金を命じられる。	
正徳3年	1714	増上寺の普請手伝を命じられる。	利隆
享保9年	1723	利興が隠居し、正甫の五男利隆が藩主となる。	
享保16年	1731	銀札を発行する。(元文元年(1736)停止)	
元文2年	1737	上野寛永寺の普請手伝いを命じられる。	
延享元年	1744	利隆が死去。翌年、長男の利幸が藩主となる。	利幸
延享2年	1745	薩摩燻の苗3万本を山間部の村々に植え付けさせる。	
宝暦4年	1754	米以外の物価の15%引き下げを命じる。	
宝暦9年	1759	大豆や材木などの他国への移出を禁止する。町方からの借入銀の返済を延期する。	
宝暦12年	1762	惠民禄仕法を実施する。利幸が死去し、弟の利興が藩主となる。	利興
宝暦13年	1763	日光東照宮修復手伝いを命じられ、惠民禄仕法は中止となる。富山町中へは上納銀を申し渡す。	
明和2年	1765	薬種改座を設置する。	
明和3年	1766	富山清水定に人形芝居を認める。来年よりの人別銭を申し渡す。	
安永2年	1773	藩校広徳館を開講する。飛騨騒動に対応し、国境に兵を駐留させる。	利久
安永4年	1775	幕府から甲斐国の川普請の手伝いを命じられる。	
安永6年	1777	利興が病のため隠居し、利幸の長男利久が藩主となる。	
安永8年	1779	藩主の叙位のため郡方に上免米を課す。	
安永9年	1780	清水村に常設の芝居小屋の設置を認める。	利謙
天明3年	1783	常願寺川、神通川が大洪水となり、約2400戸が損壊する。人別銭を賦課し、翌年の借知を申し付ける。	
天明6年	1786	財政再建策として「天明の御改法」を出す。	
天明7年	1787	贅沢品の売買を禁止する。利久が死去し、利興の長男利謙が藩主となる。	
寛政元年	1789	美濃・伊勢の川々普請手伝いを命じられる。常願寺川・神通川が氾濫する。	利幹
寛政2年	1790	幕府からの困米の命令を実施させる。城下の袋町に市場を開設する。	
寛政8年	1796	江戸城西の丸大御奥向修繕を命じられる。郡方に上納米を命じる。藩士の子弟に水練の演習をさせる。	
享和元年	1801	利謙が亡くなり、大聖寺藩の五代藩主前田利道の八男利幹が養子となり富山藩主となる。	
享和3年	1803	関東地方の河川普請手伝いを命じられ、郡方に上免米を課す。伊能忠敬が越中の海岸測量に訪れる。	利保
文化2年	1805	富山城下の各所に防火用井戸を掘らせ、竜吐水を設置する。	
文化5年	1808	幕府より蝦夷地臨時出兵の準備を命ぜられる。	
文化10年	1813	岡田屋嘉兵衛らにより塩野の開拓がなされる。百姓らが困米・新開発に反対し一揆を起こす。	
文政2年	1819	町方に銭札20万貫を申し付ける。	利友
天保2年	1831	富山城下での大火によって富山城も延焼する。	
天保4年	1833	旧銭札の新銭札への切り替えを命じるが、失敗する。石田小右衛門が来富し、領内で演説する。(天保5年・6年も来富)	
天保5年	1834	家老蟹江監物ら23名の家臣が処分される。	
天保6年	1835	利幹が隠居し、利謙の二男利保が藩主となる。	利保
天保8年	1837	利保が凶作の領内を巡視する。産物方役所を設置する。	
天保10年	1839	江戸城西ノ丸の普請手伝金2万5千両を幕府から課され、町方と郡方へ米・金の上納を命じる。	
天保15年	1844	御改正趣意書を出して百姓の質入高を年賦返済とする。	
弘化3年	1846	利保が隠居し、六男利友が藩主となる。	利聲
嘉永元年	1848	金札を発行する。	
嘉永2年	1849	利保の隠居所千歳御殿が造営される。	
嘉永4年	1851	幕府から日光東照宮の修繕費を課される。	
嘉永5年	1852	焼失していた富山城の大手門と櫓門を再建する。	利同
嘉永6年	1853	利友が死去する。翌年、七男利聲が藩主となる。	
安政3年	1856	有力商人に名前入りの銀札を発行させ、金札の使用を停止する。開物方を設置する。	
安政4年	1857	利聲が病気を理由に外出禁止となる。家老富田兵部が切腹し、家老堀田貫兵衛などら約60名が処分される。	
安政5年	1858	大地震が発生、常願寺川上流の自然ダムが決壊し、下流一帯の富山・加賀両藩領の家屋を押し流す。	利同
安政6年	1859	異国船が四方沖を通過する。利保が亡くなる。利聲が隠居し、加賀藩主斉泰の子桐松(後の利同)が藩主となる。	
元治元年	1864	島田勝摩が家老山田嘉膳を斬殺する。	
慶応3年	1867	大政奉還。王政復古の号令。	
慶応4年	1868	北越戦争に富山藩兵が出兵する。	利同
明治2年	1869	職制改正を行う。利同が北越戦争の戦功により賞典禄永世5千石を下賜される。利同が版籍奉還により富山藩知事となる。	
明治3年	1870	合寺令を発する。	
明治4年	1871	廃藩置県により富山藩が富山県となるが新川県に組み込まれる。利同は大学南校に入学、パリに留学する。	
明治5年	1872	七尾県に属していた射水郡が新川県に移される。	利同
明治6年	1873	利同が帰国し、外務省に勤務する。	
明治9年	1876	新川県が石川県に編入する。	
明治10年	1877	利同がフランス公使館勤務となる(明治15年4月まで)。	
明治16年	1883	現在の富山県が設置される。	利同
明治37年	1904	利聲が亡くなる。	
大正10年	1921	利同が亡くなる。	

企画展史資料一覧

	史資料名	所蔵	実物	パンフ	パネル	ポスター	ちらし	
はじめに 初代利次・二代正甫 十七世紀の藩主	十万石富山御領図	富山県立図書館		○	○			
	藩主利次、拝領祝儀請取につき礼状	富山県公文書館 (浅野家文書)	○	○			○	
	前田利次、抱瘡快復後の見廻来越を利常如何思召すかにつき別報方書状	富山県公文書館 (浅野家文書)	○					
	富山藩士と加賀本多家中との喧嘩一件	富山県立図書館	○					
	前田利次花押	富山県公文書館 (浅野家文書)		○	○	○	○	
	富山二代藩主正甫、亡父遺知百五拾石宛行状	富山県公文書館 (半田家文書)	○	○			○	
	化蝶類苑	富山県立図書館	○	○				
	反魂丹由緒書	富山県立図書館	○					
	富山二代藩主前田正甫肖像画	富山県立図書館			○			
	越中国富山城絵図	富山県立図書館			○			
	前田正甫花押	富山県公文書館 (半田家文書)		○	○	○	○	
	前田利興、父正甫同道にて初見おわり満足につき書状	富山県公文書館 (浅野家文書)	○					
	三代利興・四代利隆・五代利幸 十八世紀前半の藩主	簡略につき、暇下される人名書上(「随筆」十一巻)	富山県立図書館	○	○			
盗賊改方につき条々申渡書(「町吟味所御触留」一巻)		富山県立図書館	○					
越中神通川舟橋図		富山県立図書館			○			
前田利興花押		富山県公文書館 (浅野家文書)		○	○	○	○	
四代藩主利隆、父知行三百石宛行状		富山県公文書館 (浅野家文書)	○	○				
銀札発行につき条々申渡書(「御触留」巻一)		富山県立図書館	○					
上野御本坊普請手伝いにつき、諸役銀皆済期限申渡書(「町吟味所御触留」一巻)		富山県立図書館			○			
前田利隆花押		江東区教育委員会		○	○	○	○	
五代藩主利幸、父知行三百石宛行状		富山県公文書館 (浅野家文書)	○					
五代藩主利幸の老中招請次第献立覚(「御当家記録取交草」)		富山県立図書館	○					
諸物価一割半引下げ売買につき申渡書(「町吟味御触留」二巻)		富山県立図書館			○			
惠民禄仕法帳		富山県公文書館 (高浪家文書)	○	○				
前田利幸花押		富山県公文書館 (浅野家文書)		○	○	○	○	
六代利興・七代利久・八代利謙 十八世紀後半の藩主	東渠公詩集	富山県立図書館	○					
	「論語集註 廣徳館校正 一」	富山県公文書館 (岡崎家文書)	○	○				
	広徳館孔子像	富山県立図書館			○			
	旧富山藩広徳館略絵図	富山県立図書館			○			
	前田利興花押	富山県公文書館 (半田家文書)		○	○	○	○	
	六代藩主前田利興隠居、利久家督相続につき触書	富山県公文書館 (高堂家文書)	○	○				
	前田利久花押	江東区教育委員会		○	○	○	○	
	八代藩主利謙御卒去につき一件	富山県公文書館 (岡崎家文書)	○					
	洪水及び御手伝御用など過分入用につき富山家中へ金五千兩拝借の仰渡しなど一件	富山県公文書館 (岡崎家文書)	○	○				
	八代富山藩主前田利謙放鷹につき昼休所献立など留書	富山県公文書館 (高堂家文書)	○	○				
	前田利謙花押	富山県公文書館 (浅野家文書)		○	○	○	○	
	九代利幹・十代利保 十九世紀前半の藩主	伊能勘解由の領内浦々測量につき役懸りなど留書	富山県公文書館 (岡崎家文書)	○	○			
		百姓惑乱一件留帳 上	富山県公文書館 (岡崎家文書)	○	○			
石田小右衛門の演説による領民の金米献上満足などにつき直命趣意書		富山県公文書館 (高堂家文書)	○	○				
改革につき献上品々覚書(「御用品々集留」)		富山県立図書館			○			
蟹江監物一件		富山県立図書館	○					
萌黄緞		富山市郷土博物館			○			
前田利幹花押		富山県公文書館 (半田家文書)		○	○	○	○	
十代藩主利保の蘭学覚(「雑聞一巻」)		富山県立図書館	○					
御改正趣意書		富山県立図書館	○					
十代藩主前田利保の下名湯治につき休所など様子覚		富山県公文書館 (高堂家文書)	○	○				
利保公御筆		富山県公文書館 (藤田家文書)	○	○				
本草通串証図		富山県立図書館			○			
前田利保(「前田利保公能舞三姿図」)		富山市郷土博物館		○	○			
千歳御殿図	富山県立図書館			○				
千歳御殿屋根伏図(「富山市郷土博物館常設展示図録 富山城ものがたり」)				○				
前田利保花押	江東区教育委員会		○	○	○	○		
十一代利友・十二代利聲・十三代利同 十九世紀中頃の藩主	十代藩主利保側室毎木殿御用達札	富山県公文書館 (藤田家文書)	○					
	前田利友家督相続につき御扶持人より長百姓まで郡役所出頭の恐悦申上次列覚	富山県公文書館 (高堂家文書)	○	○				
	家中知行米など五か年間借地申渡書(「諸事留」)	富山県立図書館	○					
	金札貸付につき申渡書(「諸事留」)	富山県立図書館			○			
	前田利友花押	富山県公文書館 (半田家文書)		○	○	○	○	
	異国船再渡来につき諸達覚	富山県公文書館 (高堂家文書)	○	○				
	蒸気船東岩瀬沖二来航之絵	富山県立図書館			○			
	大地震による常願寺川洪水のため用水被害見分につき申上書	富山県公文書館 (佐伯家文書)	○	○				
	地水見聞録	富山県立図書館			○			
	夢ものかたり	富山県立図書館	複製					
	十二代藩主利声、病気のため隠居、加賀藩主斉康子綱松養子願書案	富山県公文書館 (浅野家文書)	○					
	前田利聲花押	富山県公文書館 (浅野家文書)		○	○	○	○	
	十三代藩主利同、年頭嘉儀として太刀馬代到来怡悦につき礼状	富山県公文書館 (浅野家文書)	○					
島田勝摩・山田嘉騰之一件	富山県立図書館	○	○					
越富奇談島山物語中巻	富山市郷土博物館			○				
戊辰役、富山藩士出陣之図	富山県立図書館			○				
前田綱松の北越戦功により賞典録五千石下賜	国立公文書館	複製	○					
戦功賞祝賀曳山図(「富山県史」)				○				
前田綱松、版籍奉還上表	国立公文書館	複製	○					
富山藩知事免官の達	国立公文書館	複製						
前田利同花押	富山県公文書館 (浅野家文書)		○	○	○	○		
藩主と富山 廃藩後の	前田利同、大学南校入学願書	国立公文書館	複製					
	フランス留学につき願書一件(「戊辰十一月至癸五月諸願何届等調書」)	富山県立図書館	○					
	前田利同よりの小学校寄附金についての上申(庶第四〇号)	国立公文書館	複製	○				
	東北鉄道会社創立願	富山県公文書館 (高浪家文書)	○					



■ 交通機関

- JR富山駅発バス ● 新港東口行〈県立図書館前〉下車徒歩……………3分
 ● 高岡小杉方面行〈呉羽山公園〉下車徒歩……………10分